
夏の思い出 2

坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の思い出2

【Nコード】

N2104P

【作者名】

坊

【あらすじ】

「僕」の幼かった頃の思い出。

完結編です

僕はお姉ちゃんと手をつないであてもなく歩いた
日も暮れかかった頃僕たちは砂浜にたどり着いた
お姉ちゃんは海を見てはしゃいでいる
生まれてからほとんど家を

出してもらえなかったお姉ちゃんは
きつと海を見るのが初めてなんだろう

いつしか家族で海水浴にいったときも
お姉ちゃんは家で留守番だった

夕日が沈みかけてる海ではしゃいでるお姉ちゃんは
ほんと楽しそうだった

お姉ちゃんの天使のような笑顔を見ると
このまま家になんて帰らなくていいやと思った

その後もお姉ちゃんと水遊びをしてるうちに
辺りはすっかり暗くなり夜になってしまった

するとお姉ちゃんは僕の手を握って
そのまま海に向かって歩き始めた

「おねえちゃん？またうみであそぶの？」
お姉ちゃんはどんどん進み

波は僕の腰あたりまで来ていた
さつきよりも水が冷たく感じる

水が僕の首あたりまでくると

僕は急に怖くなってきた

「お姉ちゃん、戻ろうよ！」

僕が言ってもお姉ちゃんの耳には聞こえていない

やがて僕の背丈まで水が来たとき

僕はとうとうお姉ちゃんの手を振りほどいてしまった

お姉ちゃんは寂しそうな顔で僕を見ていたけど

それ以上僕を連れて行こうとはしなかった

そしてそのまま僕は意識を失った

気がつくと僕は病院にいた

お父さんとお母さんが心配そうに僕を見ている

「どうして一人で海になんて行っただの！」

そう言っ僕を怒鳴った

「ひとりじゃないよ、おねえちゃんがいつしよだもん」

僕が言くと両親は不思議そうな顔をして僕を見ていた

何度も説明をしたが

両親は不思議そうに僕を見つめるばかりだった

そのまま僕が家に帰ると

お姉ちゃんの部屋は跡形もなく消えていた

部屋だけじゃない

服も写真も靴もお姉ちゃんの物は何一つなかった

でも庭を見ると盛り上がった土の上に

ひまわりの芽が一本だけ生えていた

大きくなつた今でも

僕はひまわりの花を見ると

お姉ちゃんのことを思い出す

優しかったお姉ちゃん

笑顔がすてきだったお姉ちゃん

でもお姉ちゃんは永遠に年を取らないから

いつしか僕の方が年上になつてしまうのかな

それでもまだ弟で居させてくれるかな

今度もし会えるのなら

今度こそその手を離さない

今年も夏が来る

また僕はお姉ちゃんを捜しに海に行く

今度はしっかりと手を握り合つていられるように

（後書き）

初めて書いてみたので

自信がありません

なるべく読みやすく書いてみたつもりです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2104p/>

夏の思い出2

2010年11月29日08時31分発行